



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第27主日 B年(2021年10月3日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：創世記 2章18—24節

第二朗読：ヘブライ人への手紙 2章9—11節

福音朗読：マルコによる福音 10章2—16節

テーマ：^{かみ}神のおもい、^{かみ}神のわざ

三つの朗読から

第一朗読にある^{さいしよ}最初の人間の^{さけ}叫び「ついに、これこそ……」(23節)に^{ちゅうもく}注目したいです。最初の人^{ひと}アダムは、^{いっしょ}一緒に生きる人を求めていた。自分の^よ呼びかけに^{こた}答える人をもとめていました。やっとの^{よろこ}思いでそのような人と出会ったのです。そこに^{よろこ}喜びがありました。出会いの喜びです。

第二朗読の「^{はじ}恥と^{きょうみぶか}されない」(11節)は興味深いです。神さまは^{すく}救いを^{ねつぼう}熱望している信仰者から神さまと^{むか}呼ばれることを^{はじ}恥としません(ヘブ11章16節参照)。彼らを神の国へと^{むか}迎え入れるのを^{のぞ}望んでいるからです。イエスさまは、神さまの^{ねが}そのような願いを実現するただ一人の子、^{おんこ}御子です。ですから、自分の^{ちから}力では自分の^{おか}犯した罪を^{つみ}償えない^{つくな}惨めな人間の兄弟となることを^{はじ}恥とされなかったのです。

福音朗読の「^{つく}神は人を男と女とにお造りになった」(6節)を心に^と留めたいです。イエスさまは、^{りっぼう}律法の^{しょうまつせつ}枝葉末節と、正しいか正しくないかに^{たいど}こだわる態度から^{だっきやく}脱却させようとしています。神の^{こんぼん}わざの根本へとわたしたちを^{いざなう}いざなうのです。

説教

今日の朗読箇所には神さまのおもいと神さまの^{とうじょう}わざがあちこちに登場します。第一朗読での「人が^{ひと}独りであるのは^よ良くない。彼に^{こどく}合う助ける者を造ろう」(18節)は、^{おちい}孤独に陥りがちな人間に対する神さまの^{やさ}優しいおもいです。人間に対するおもいが、^{たす}新たな助け手を造ろうと、

神さまがわざを実行するきっかけとなります。

「人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた」(19節)。ここにも神さまの人間に対するおもいが見えてきます。神さまはご自分で動物の名前を呼ばずに、人間に呼ばせるのです。「どう呼ぶか」じっと見ておられた神さまの寛大なまなざしがあります。

「見つけることができなかった」(20節)。人間が落ち込み、ガッカリする様子を神さまは見つめておられたのでしょうか。助け手を見いだせない人間の哀しみが、神さまがさらなる人間を創造する動機づけとなります。

女(イシャ)の創造の箇所も印象的です(21-22節)。神さまはできるにもかかわらず、まったく別なものから女を造りませんでした。男(イシュ)の一部分を取りだすところから造るのです。それは男も女も、もともとはひとつであったことを指し示しているかのようです。「ついに、これこそ……」(23節)と喜ぶ、男の姿を見て、神さまはどう思ったのでしょうか? 出会いの喜びを味わう最初(さいしよ)の人間は、もはや孤独(こどく)の淵(ふち)へと沈む(しず)ことはないのです。こうして、神さまのおもいは、神さまのわざを通して実現(じつげん)していきます。

福音朗読では、離縁(りえん)が律法(りつぽう)にかなっていないかどうかと問題にするファリサイ派の人々に対して、イエスさまは神さまが始めに抱(だ)いていたおもいとわざへと帰(かえ)って行くようにと促(うなが)しているようです。「神は人を男と女とにお造りになった」(6節)。この神のわざはゆるぎないのです。離縁(もんだい)は人間の問題(もんだい)であって、それを正しいかどうかと気にするのは人間の小さなおもいです。元々、神さまによって男と女に造られたのなら、その結びつき、つながりは「神が結び合わせてくださったもの」(9節)です。ここにも結び合わせてくださる神さまのおもいとわざがあります。

第二朗読では、イエスさまが「神の恵み(めぐ)によって、すべての人のために死んでくださったのです」(9節)と記(しる)されています。神のおもいと神のわざは「一つの源(みなもと)」(11節)にあります。わたしたちは、イエスさまと同じくその源につながられています。ですから、イエスさまを「兄弟(よ)

神のおもい、神のわざの中で生きるためには福音朗読の最後(さいご)にあるように「子どものように」(15節) イエスさまを受け入れなければならないでしょう。